特別企画 ／ Interview

小山実稚恵 Michie Koyama

名実ともに現代の日本を代表するピアニスト

協奏曲では60曲以上のレパートリーをもち、国内外のオーケストラとの共演や、リサイタル、室内楽などでステージに立ち、常に活躍し続けているピアニスト、小山実稚恵さん。近年では、子どもたちに向けた活動にも力を入れて取り組んでいます。小山さんが、ご自身のこれまでの音楽人生や、ピアノや音楽との向き合い方、未来を生きる子どもたちへの思いなどについて、さまざまに語ってくださいました。

ピアノが好き

bouquet［ブーケ］編集部（以下、b）：小山さんは、どのような子ども時代を過ごしたのですか？

小山実稚恵：私は岩手県盛岡市で育ちました。音楽とは関係ないごく一般家庭の一人っ子で、おもちゃのピアノが好きでいつも遊んでいました。本物のピアノが欲しいと親にねだり、6歳の誕生祝いにアップライトを買ってもらえることになりました。それで最初に近所のカワイのピアノ教室に行き、そのあと盛岡市の吉田見知子先生に習いました。というのも、母が吉田先生の教室の発表会を観に行き、生徒さんたちがピアノをとても楽しそうに弾いていたので、ここがよいと思ったのだそうです。

b：吉田先生のレッスンは、いかがでしたか？

小山：私自身ピアノが大好きでしたし、レッスンも楽しかったのです。先生もとても熱心に教えてくださいました。習いたての頃は週に1回のレッスンでしたが、それが週2になり、後々は毎日のように行くような感じになり、学校が終わればそのままピアノ教室に直行していました（笑）。

b：高校は、入学が非常に難しい藝高（東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校）へ進学されていますね。藝高は多くの音楽家を輩出していますが、その頃からピアニストへの道を意識していたのですか？

小山：いいえ、全然（笑）。ピアノはとにかく大好きでしたから、ずっとピアノと一緒にいるのだろうなと漠然と思ってはいました。ピアニストになるというよりはピアノと人生を歩めれば幸せだと考えていたのだと思います。小さい頃からあまり競争する観念はありませんでした。ですが、吉田先生の勧めでコンクールはときどき受けていました。コンクールのために東京に出ていくことが、小旅行のようでうれしかったですね。

中学3年生のとき、父の転勤で東京に引っ越すことになり、藝高の受験を決めました。今思うとですが、吉田先生のレッスンはすばらしく、藝高受験のためには十分な進度に達していたような気がします。中学3年生の1年間は1か月に1回ぐらい、逆に、東京から盛岡の吉田先生のところにピアノのレッスンに通っていたんですよ。

b：入学してみていかがでしたか？

小山：藝高では田村宏先生に師事することになりました。習い始めて間もないあるとき、田村先生が不思議そうな顔をして「君は僕の言ったことを直そうと思ってないの？」とおっしゃったんです。そこで私、「言われたことは直すんだ!?」と驚いたんです。ピアノのレッスンで習ったことを、自分で自分の中に取り入れるというより、それまでは吉田先生が、私の身体が自然に覚えるまで根気よく教えてくださっていたのですね。順を追って教えてもらう癖がついていたのだと思います。だから、すべてが受け身だった。とても申し訳ないことをしていたのだと気が付きました。

b：大学ではどのように学ばれていましたか？

小山：のんきな性格なので、まだまだのんびりやっていました。違う楽器の友人と合奏して楽しむことも多かったです。長い目で見ればそこでレパートリーが蓄積されたから、あれはあれでよかったのかな。大学2年の頃先生に「コンクール受けてみれば？」と勧められました。課題曲はたいしたことのない曲数なのですが、当時の私にはこれらの曲をどのように仕上げていけばいいのか、全く見当がつきませんでした。自分で自分のことが分からないなんて「このままではまずい！」と愕然としました。それから

小山さんのご自宅で。後ろのピアノはジョン・ブロードウッド

ですね、自発的にピアノに向き合うようになったのは。ですから、私は英才教育を受けて効率よく考えて学んだタイプではありません。ピアニストという職業を考え始めたのは、大学院生の頃に受けた、チャイコフスキー国際コンクールからでしょうか。

チャイコフスキー国際コンクール

b：世界屈指のピアノ・コンクールとして、*チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールがありますが、小山さんは両方に入賞した日本人で唯一のピアニストですよね。念入りに準備されたのでしょうか？

小山：いいえ、それが恥ずかしいことに全く違うんです。当時「海外派遣コンクール」という、受賞すると海外のコンクールを受けるための渡航費などを負担してくれるコンクールがありました。それに受かり「どのコンクールを受けよう？」と（笑）。なんの知識もありませんでしたので調べたら、4年に1度のチャイコフスキー・コンクールがモスクワで翌年あることが分かりました。「受かるはずはないから、せっかくならば大きいコンクールがいいな、参加しながら世界の様子を見てみよう！」とエントリーしたんです。初めて受けた海外のコンクールになりました。

b：実際に受けてみてどうでしたか？

小山：自分の演奏のないときは、他の演奏者をよく聴きに行っていたのですが、特にロシア人の演奏には驚きました。コンクールなのに、もう完全にピアニストのような演奏でした。私はといえば、一次予選の曲目はさすがに準備していましたが、すぐに落ちてしまうと思っていたので、ステージが進むにしたがい準備不足の状態でした。それが、あれよあれよと驚いている間に本選に出場できることになり……。本選ではモスクワ放送交響楽団とチャイコフスキーの協奏曲と自由選択の協奏曲の2曲を演奏しなければいけません。自由曲のラフマニノフの協奏曲は、大学の卒業演奏会で藝大のオーケストラと弾いたことがありましたが、チャイコフスキーの協奏曲にいたっては、レッスンで1度か2度、友達が弾くオーケストラ・パートのピアノ伴奏と合わせて、先生の前で弾いたことがあるだけ。オーケストラと合わせた経験もありませんでした。それが、ロシアの最高のオーケストラとの共演です。今思うと無謀すぎることでした……。

b：世界中から数えきれないほど大勢のピアニストが、ピアニスト人生をかけて目指してきますし、決勝までに、多くの難曲も大曲も演奏しなくてはならないので、大変なコンクールだと思います。

小山：いろいろと運もよかったと思います。私が受けたときは、まだロシアがソビエト連邦だった頃ですからコンクールは国家を挙げての大きな行事でした。そして最近のコンクールのように、まだ企業や楽器会社がコンクールに参入できない時代でした。だから楽器はスタインウェイが2台だけ。それが2台ともほんとうにすばらしい楽器でした。その最上のピアノを自由に選べることにも大感激しました。

b：どんなピアノを選ばれたのですか？

小山：2台のピアノはそれぞれ全く違う個性をもっていました。予選前日の夜に選ぶのですが、一次予選ではコロコロコロって転がるような単音が美しいピアノを選びました。演奏予定の『鬼火』（リスト作曲）のためにあるピアノだと直感したからです。

*チャイコフスキー国際コンクールは4年に1度、ロシア・モスクワ音楽院のホールで開催されるコンクール（2019年に16回目を開催予定）。なお、チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクール、エリザベート王妃国際音楽コンクールは、世界三大コンクールとも言われており、世界の若手音楽家にとっての登竜門とされている。

一次予選の本番、私は朝早い順番だったのですが、ホールには大きな肖像画が掛かり、壁には窓があって、窓からフワーっと柔らかい光が差し込んできました。そのステージに立って、初めて体験するピアノの美しい響きに心の底から感動しました。あれから30年以上演奏会を続けていますが、あの一次予選の舞台こそが私の中の最高のカルチャーショックでした。あの瞬間があったからピアニストの道を歩みたいと強く思い、演奏活動を続けているのだと思います。

楽器と音と感覚

b：小山さんがピアニストとして大切にしていることは何ですか？

小山：うーん……、感じたことを何でも正直にやってみることでしょうか。そして、ピアノという楽器と、どれくらい仲良くなれるかということをいつも大切にしています。ピアノは持って歩けませんので置かれているピアノと常に対話しなくてはいけません。それから、同じピアノでも、リハーサルと本番では全然違いますし……。

b：ピアノはそこまで変わるのですか？

小山：驚くほど変わります。湿度や温度、舞台のライトでも変化しますし、本番ではお客様の服で音が吸われることもあります。弾いているうちにピアノ本体も温まったり、弦も振動で変化したりしますから、時間とともに音が変化して、花開いてくるような感覚もありますね。たとえばバラの花のような感じといえばいいでしょうか。蕾のときも、満開のときも、もう散りそうなときも、音色はそれぞれのよさがあります。いろいろ感じながら、考えながら演奏するのですが、ピアノの状態が曲想とピッタリ合えばラッキーですよね。

b：小山さんが12年間続けてきたBunkamuraオーチャードホール（東京都渋谷区）でのリサイタルでは、毎回イメージカラーを設定してプログラムを組んでいましたね。音楽と色彩感覚について、どうお考えですか？

小山：音と色はとても密接です。誰かの演奏を聴いて「この人の音は色を感じる」と思うことがありますよね？ “何色”と決まった色ではないけれど、“何かの色”を感じる音のような感覚です。何色を感じるかは、人によって違っていいと思いますし、違って当然だと思うのです。音色は感情や感覚によってつくりだされるものだと思えます。だから私が「この色」と感じて弾いていても、聴き手は一人一人違う感じ方で受け止めているわけです。それに、たとえば「青」と言葉で表現してもいろいろな「青」がありますよね。濃くて力強い「青」もあれば透明感のある「青」もある。色というのは明確に共有できない不思議なもの、そして音もそうなんです。

b：ピアノは技術だけではなく、感覚的なことも重要なのですね。

小山：その日の感性、感覚は演奏に影響すると思っています。同じフレーズでも日によって違う感覚をもつことがあります。昨日はあんなに夢中で弾いていたのに、今日はあまり感じないということもありますし。身体的なこと、インスピレーション、響き方の具合なのか、あるいは視覚的なものなのか……分からないけれど、いろいろなことが作用して、感覚が変化し、演奏に影響を与えることは、確かに起こります。

b：繊細な世界ですね。

小山：だからこそ音楽に対しての興味が尽きないのですね。計算しても測れずに、予測できないことがあふれているのが音楽です。自分にないものを与えてもらえることもあるし、逆に自分がもっていたものを失ってしまうこともある。音楽の世界においては、二度と同じ瞬間はありません。でもそれって、とても魅力的です。

b：小山さんは音楽以外のお仕事で、スポーツ選手のかたがたとの対談も行っていましたね。

小山：私、スポーツ観戦が好きなんです。スポーツと演奏の世界って似ているといつも思うんですね。演奏家は、決められた日の決められた時間に、自分の状態がよくても悪くても弾かなくてはいけない。さらに、どんなに用意してもうまくいかないことがある。自分を調整することが、とても大切です。それってスポーツの世界とそっくりだと思いませんか？ スポーツ選手と話をしてみると、ピアノと馴染みのないかたでも細かなニュアンスが伝わるんです。刻々と変わる感覚の話も通じますし、同じようなことを感じていらっしゃるかたばかりです。世界は違っても感覚は共通です。

b：スポーツ選手と接する中で、特に印象的な点はどのようなことですか？

小山：音楽の世界と違うなと感じたのは、「〇〇さんのこういう面は、ほんとうにすばらしいですね」とお話しすると、皆さんがキッパリと「ありがとうございます」と返してくださること。とてもすがすがしく感じました。私などは、褒め言葉をいただいたときなど「いえいえ」「とんでもない……」と困惑の中で答えてしまうのですが、スポーツ選手は言葉をそのまま受け止めますね。常に「こういう点が自分の長所だ」と認識して、自分を信じて勝負に向かわれているからだと思いました。勝ち負けがはっきりした世界、紛れがない世界だからこその潔さですね。そういう返答の先には、必ず次に向けてのエネルギーがあることがすばらしいと思いました。

愛猫ララちゃん

子どもたちの心のために

b：2015年から仙台で夏に開催されている復興支援イベント「こどもの夢ひろば“ボレロ”」は小山さんの発案でスタートしました。“日立システムズホール仙台”を開放し、音楽、科学、スポーツ、茶道、料理、アートなど、さまざまなジャンルを楽しめる体験型の催しで、2018年もチケットは完売でした。どのような意図で企画したのですか？

小山：子どもたちの感動する心やワクワクする心が育つきっかけになるイベントができたらと、企画しました。音楽でなくたって何でもいい。子どもたちは何が好きか分からないから、いろいろな世界を体験できるようにしています。ワクワクする心をもっていれば、どんなことにもチャレンジできると思うんです。まず触れてみて感動する心をもつことが大切なのだと思います。文学でも音楽でもスポーツでも……世界が広がる。ワクワクする気持ちさえもち続けることができれば、辛いことがあっても続けることができる。私自身音楽に触れながらワクワクしているからこそ、ピアノを続けているのだと思います。「いいな」と感じてほしいなと思っています。

b：どのようなご経験でそう考えたのでしょうか？

小山：私は幸運なことに盛岡の自然に囲まれて育ちました。美しい自然に触れて感動する機会に恵まれていたんです。そして、音楽を通じて良い出会いにも恵まれました。すばらしい実力や感性をもって

いるのに、スランプに陥って自分を許せなくなり辞めてしまう人がいます。たしかに一つの事をやり遂げるためには、技術を磨かなくてはなりませんから、つらさが伴います。ついワクワクする気持ちを忘れてしまいがちですが、そこを乗り越えて「ピアノが好きだ」と実感し、感動する心を大切にすることが必要だと思うのです。

b：子どもたちの未来を考えての企画なのですね。

音楽は本人の言葉で

b：音楽家にとって、どのような指導者が理想だとお考えですか？

小山：「魂が感じること」を教えてくれる先生ではないでしょうか。非の打ちどころのない立派な演奏はもちろんすばらしいのですが、心を打つ演奏はもっとすばらしいと思います。「人の心に残るものとはいったい何か」と生徒が考えるきっかけを与えてくださる先生、そして、教えが生徒本人の意思につながるように、感性が演奏に出てくるよう導いてくれる指導、それはすごいと思います。でも結局はどんな世界でも最後は本人の自覚なしではできないのですよね。音楽には正解がありませんから、自分が感じること、考えることを信じて表現するしかないんです。良いと思えるものを外面から取り入れても、それはツギハギの音楽だと思います。表面上はきれいに整って聴こえても、心が伝わらない。音楽は、本人の言葉で語らないと、人の心に届かないと思うんです。

b：小山さんご自身の目標はありますか？

小山：「いつの日か自分がこう弾きたいと思ったままに、弾けたらいいな」と思います。結局はそれしかないのですよね。私の永遠の目標です。「いつかは弾ける日が来るかも」と思いながら練習しています。「もうこれくらいでいいや」と思ったらそこで止まってしまう……。

b：まだご自身の演奏に納得していないのですか？

小山：納得なんて……ほど遠いです。思い描く音楽と自分の実力のギャップがありすぎるのでしょうね。理想の音楽と現実の響きの狭間で、いつも葛藤しています。ピアノの音色（ねいろ）は、指や腕を鍵盤に落とす表面積やスピードの使い方、タイミングによって質感も色彩感も変わってしまいます。ほんのちょっとしたことで全く違う音色にもなってしまう。ピアノは弾き方によってさまざまな音色が出る楽器なんです。だからこそ、自分が望むような音色を作ること、フレーズを奏でること、全体を構成すること……できないことだらけです。自分がよく準備したと思うコンサートほど、何でこんなにだめなのだろうと感じるような気がします（笑）。

b：今の子どもたちに、どのようなことを伝えたいですか？

小山：まずは本能のままにトライしてほしいと思います。そして続けること。だけど「ただ続ける」という状態に陥らないでほしいです。感じて続けてほしいと思います。ワクワクしてものごとに接していれば、ハッとするようなところに解決や発見の糸口を見付けることができるかも。毎日アンテナを張りましょうね。

小山実稚恵（こやま・みちえ）　ピアニスト

チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールの二大コンクールに入賞以来、第一線で活躍し続けている。CDはソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結んでおり、30枚目となる最新盤の『バッハ：ゴルトベルク変奏曲』は『レコード芸術』誌の特選盤に選ばれた。著書に『点と魂と ―スイートスポットを探して』（KADOKAWA）。2005年度文化庁芸術祭音楽部門大賞、13年度東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門本賞、15年NHK交響楽団「有馬賞」、15年度文化庁芸術祭音楽部門優秀賞、16年度芸術選奨文部科学大臣賞など受賞歴多数。17年度「紫綬褒章」受章、18年度大阪市市民表彰を受ける。東京藝術大学、同大学院修了。吉田見知子、田村宏両氏に師事。

上野耕平の

crossing［クロッシング］

第3回

神奈川県JR鶴見（つるみ）線昭和（しょうわ）駅

猫が駅員？　鶴見線昭和駅。

神奈川県横浜市と川崎市の工業地帯をのんびり走る鶴見線。本線と2つの支線があり、中には工場の出勤、退勤時間しか運行されない線も。昭和駅は本線の終点の1つ手前の無人駅。可愛い野良猫たちがまるで駅員のように陣取っている。日中はほとんど列車が来ず、猫たちの時間。ホームの端から線路を見守るその姿はまるで駅員の安全確認。程なくして3両編成の列車がのんびりやってきた。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

上野耕平を中心としたサックス・カルテット「The Rev Saxophone Quartet（ザ・レヴ・サクソフォン・クゥルテット）」によるCD『Fun!』（日本コロムビア）［2,500円＋税／COCQ-85442］が好評発売中。
〈収録曲〉J.S.バッハ（伊藤康英編）『G線上のアリア』、ビゼー（萩森英明編）『カルメン幻想曲』、ハービー・ハンコック（宮越悠貴編）『Watermelon Man』、稲森安太己『ふるさと狂詩曲』、坂東祐大『Mutations: A.B.C.』

編集部メモ

駅の設置当時、昭和肥料（現在の昭和電工）の工場の最寄り駅であったことから、昭和駅と名付けられた。

行き方

①JR鶴見線の起点、鶴見駅へは、
東京駅からJR京浜東北線で約31分、
または横浜駅からJR京浜東北線で約11分。
②鶴見駅でJR鶴見線（扇町（おうぎまち）行）に乗り換え、約15分で昭和駅着。

NIPPON MEGURI

日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えているかたがたを取材します。第4回は、福岡県八女市、ギター職人の金子輝夫さんに、お話を伺いました。

第4回　福岡県 八女市
金子輝夫　ギター職人

「手を伸ばせば星に手が届きそう」――夜になると、誰もがそんな思いをもってしまう、福岡県八女市星野村。標高が高いため星が明るく光り、お茶、温泉、古陶星野焼など、自然が育む文化にあふれた美しい村です。

緑豊かなこの場所で、金子輝夫さんはギター製作工房を営んでいます。金子さんは、少年時代からギター作りに人生を捧げてきたかた。明るい日ざしがまぶしい午後、工房を訪れました。

先を見据えた材料集め

――金子さんがギターに出会ったのは、いつ頃ですか？

「小学校5年生の頃です。子どもの頃の唯一の楽しみだったラジオで、あるとき聴いたこともない音色の音楽が流れ出したんです。『この楽器はいったい何だろう？』と思いながら聴いていると、演奏が終わって『ただいまの演奏はアンドレス・セゴビアです』と。そこで初めて、スペインの巨匠がギターを弾いていたのだと知りました。準備していた鉛筆でメモをとり、すぐに音楽関係の出版社に手紙を出してセゴビアについて質問しました。そうしてギター作りの道に進みました」

――ギターを弾くのではなく、作ることに興味をもったのですね。

「昔は母が大川市で家具屋を営んでいて、桐箪笥を作っていたんです。母が手作業で塗装をする横で、木の切れ端を使って、いろんなものを作っていましたからね。小学生のときには、木工用具のほとんどが使えました。何もない時代だったからこそ、ギターを作ることにのめり込んだのでしょう。あの頃から今までずっと、頭の中はギターだけ。他には見向きもしなかったですね」

――ギター作りに必要なことは何ですか？

「何より大切なのは材料集めです。私は20歳から材料を集め始めました。20歳から23歳まで東京で働いており、お金が貯まると、少しずつ材料を買い集めていましたね。例えばこの独特な模様のものはいちばん新しく、45年前に購入したハカランダですが、同じ頃にワシントン条約で輸出入が禁止されたので、今では見ることさえ難しいですよ【写真①】。50年前に買ったローズウッド、セドルなどもあります」

――新しいもので45年前なのですか。きれいな木ですね。

「そうでしょう。いくら腕を磨いても技術があっても、材料がなければ作れません。かつて、ある大手製造メーカーが、家具作りのために、楽器に最適な木を伐採してしまったことがありました。家具には向いていない木のはずなのに、どんどん家具作りに使われ、楽器向きの貴重な木が減ってしまったのです。ほんとうにもったいないことでした。木の種類は無数ですから、その性質を判断するのはとても大変で、膨大な知識を必要とします。楽器に適した木は現在、絶滅したか伐採禁止か、どちらかです。これは50年前から予測できたことなので、まずは材料集めに走りました」

――ここにはたくさんの道具もありますね【写真②】。

「私はこれらの道具を使い、全て手作業でギター作りを行っています。道具は新潟の工房に注文して、私の手に合わせて作ってもらいます。イタリアのヴァイオリン製作にも日本の道具が使われているぐらい、日本の職人さんの作る道具はすばらしい。日本はね、木に対することは世界一です。木のための道具、木材での製作技術や建築技術……。西洋は石の文化だけれど、日本は木の文化の国でしょう？ですから、日本はもっと木に携わる職人さんを大切にしてほしい。実際にヨーロッパを見てきて、そう思いました」

ギター作りはいつも楽しい

――行かれた国はどこだったのですか？

「33歳の頃、偶然知り合ったフルート奏者の中谷恵一さんの紹介でスイスへ渡り、3年ぐらいでしょうか、バーゼルから田舎のほうへと入った村にいました。大きな鈴をつけた牛がガランガランといわせているような場所です。スペインのマドリードに行く機会もあり、そこでアンドレス・セゴビアに実際会って、いろいろな話もできました」

――全てのスタートとなった巨匠に、実際にお会いできたのですね。

「何度も会っています。主にギターの話をしましたよ。日本では、福岡にセゴビアが来たときにも会いました。彼が80歳を超えていた頃ですが、握手したときの手が印象に残っています。グローブみたいに大きくて、柔らかくて、ふわーっとした手。こういう手が、いい音を出すのだと感じました」

――ギターを通して、多くの経験をされているのですね。

「忘れがたい体験もありました。2012年の九州北部豪雨のときのことです。この辺りにもどんどん雨が降ってきて、避難指示が出ました。でも、私はこの工房にある貴重な材料のことが心配で、避難する気にはなれなかった。もう、この材料と一緒に流されても構わないと覚悟して、ここにとどまっていたんですね。すると、急に雨がやんだのです。周りには流された建物が多かったのですが、不思議なことにうちだけ助かった。最近は、小学校や中学校で、ギターの作り方をお話しし、福岡のギタリストが私の作ったギターで演奏をする、ということもやっています。子どもたちを喜ばせたくて。ほんとうの意味での『手作りのよさ』を伝えたいんです」

――金子さんのギターは、市販されていますか？

「注文しか作りません。現在は、最短でも5年は待っていただいています。2か月に大体3本ぐらい作っていますが、私が今持っている材料を使い切るには、最低でも200年かかります。あと200年生きれば使い切れる（笑）」

――ぜひあと200年、作り続けていただきたいです！

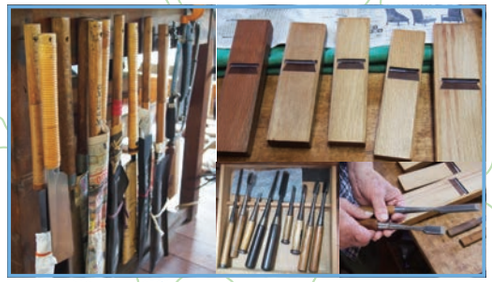
「そうですね（笑）。ギター作りはいつも楽しい。嫌なことがあっても、ギターを作っているときは楽しいんです。一つ作り上げたら『次はこういうのを作りたい』と、毎回新しい目標ができます。同じものは二度と作りません。私はギターを作るとき、弾いてくれる人の20～30年後を想像しながら、音のことだけをひたすら考えて作ります。いい材料のギターで、いい音を出してもらいたい。それだけです」

金子輝夫（かねこ・てるお）
1942年福岡県柳川市出身。小学5年生よりギター職人を志す。30代でスイスに渡り、製作や音楽を学ぶ。現在は八女市在住。個人製作家として一本のギターを全てハンドメイドで作っている。

【写真①】ハカランダ。非常に貴重で、高価な木材

工房の一角。製作中のギターや、材料の木が並んでいる

このようにまっすぐに線の入った柾目（まさめ）の板は、割れにくく丈夫だという



【写真②】鉋（かんな）、のみ、鋸（のこぎり）。鉋はそれぞれ使われている木の種類も用途も違う。27歳の頃に、これらの道具のほとんどを揃えたという。全て職人による手作り

金子さん製作中のギター。取材時は、ニスを塗り重ねる工程だった

One day, one moment [ワンデー ワンモーメント]

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ
写真家。日本舞台写真家協会会員。
東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。
官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的な魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。
http://hidaki.weebly.com

5枚目

一瞬の夢

日本がいちばん寒いころ、桜がふと恋しくなる。

去年の春、仕事がたまたま忙しく、満開の時期に桜の作品撮影ができなかった。やっと時間ができて、葉桜の下をトボトボと歩いた。人影のない裏通りに差し掛かった時、びゅん、と強い風が吹いて、あっという間に一面ピンク色の花びらに包まれる。「あ」と声も出ないほどの美しさに身体(からだ)ごと飲み込まれ、なぜか胸が切なさで一杯になり、写真を撮った。

一瞬の風、誰もいない。風がやめば、何事もなかったかのように穏やかな時間が流れていく。さきほど見た光景が夢のようだった。

その一瞬の出来事は、過ぎる季節の中で忘れてしまっても、またこうして思い出してしまうのです。

次代につなぐ
05
校長先生の講話

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第5回は、音楽を通して潤いのある学校づくりを目指した河内智美先生が、テレビ朝会で行ったミニ音楽授業からお届けします。『シャボン玉』の歌詞の背景に存在する詩人の境遇や気持ちを、子どもたちに伝えたお話です。

河内智美（こうち・さとみ）
岡山大学教師教育開発センター教授（特任）

第５回　河内智美 先生（岡山市立宇野小学校　第37代校長）

歌の心を大切に

数年前、かつての教え子たちが数人集まり、
小学校時代のなつかしい思い出話を語ってくれました。
「音楽の時間、いつも踊りまくっていたよね。」「そうそう、カエルのまねしてぴょんぴょん跳びながら歌ったこともあったわ。」などなど、話は音楽の授業のことばかり。
他の教科の授業にも熱心に取り組んだはずですが、全く会話にのぼりません。
「やはりそうなんだなあ……」と、少し複雑な思いで教員生活を振り返りました。
私は学級担任より長く、13年もの間、音楽専科を担当しました。
音楽の授業づくりに没頭した日々が思い出されます。音楽が苦手な子どもたちを何とか音楽好きにできないものかと始めた、授業冒頭のノリノリのダンス。歌の情景や曲想を捉えやすいようにと多く取り入れた身体表現。学級担任のときも音楽満載の学級経営をしていたので、二十数年の月日を経ても、かつての教え子たちの脳裏に焼き付いているようでした。
他の教科の授業が話題にならなかったのは少し残念ではありましたが、
音楽の力の凄さを改めて感じたひとときでした。
学校経営においても音楽で潤いのある学校づくりをしたいと願っていました。
そのためには、子どもたちだけでなく先生たちにも伝えたいと思い、
ときにはテレビ朝会でミニ音楽授業をすることがありました。
昔行っていた１時間の授業をほんの数分で再現するのですから、成果のほどは疑問です。
音楽の味わい方や表現の仕方に少しでも関心をもってもらえていたらいいのですが……。

30年ほど前の音楽の授業風景。シャボン玉が飛ぶ様子を身体表現しながら歌う子どもたち

音楽発表会が近付き、学校中に歌声や楽器の音が響き渡っています。とても楽しみです。今日は、最後の仕上げにもうひと工夫してほしいことをお話しします。

歌には、歌詞やメロディーをつくった人が表したいと思った様子や気持ちが込められています。それを見つけて、聴いている人にもよく伝わるように表現することが大切です。みなさんがよく知っている『シャボン玉』という歌で試してみましょう。

ここにシャボン玉（模型）を作ってきました。歌に合わせて飛ばしてみます。

♪「シャボン玉　飛んだ　屋根まで飛んだ」
［シャボン玉の模型を動かしながら］こうして高く屋根まで飛んだのですね。
♪「屋根まで飛んで　こわれて消えた」
［模型を下ろしながら］あれ？ シャボン玉は消えてしまいましたね。
♪「シャボン玉　消えた　飛ばずに消えた　生（うま）れてすぐに　こわれて消えた」
シャボン玉はずっと消えたままです。

この歌はシャボン玉がいっぱい飛んでいる歌だと思っていましたが、よく歌詞を見るとそうではないことが分かります。

シャボン玉が飛ぶと楽しい気持ちになります。楽しい気持ちを赤いハートマークで表してみましょう［簡易楽譜の「屋根まで飛んだ」の歌詞のあたりに赤いハートマークを貼る］。消えると悲しい気持ちになります。悲しい気持ちを青色のハートマークで表してみましょう［同様に歌詞を確認しながら貼っていく］。こんなに青色のハートマークがいっぱいになりました。

それもそのはずです。実は、この歌詞を書いた野口雨情さんという人の幼い子どもが亡くなってしまったのです。野口さんはとても悲しんで、子どもをシャボン玉としてこの歌詞を書いたそうです。

では、歌の続き「風　風　吹くな」には野口さんのどんな気持ちが込められているのでしょうか。「シャボン玉が消えてしまうような風は吹かないでほしい。」「シャボン玉、つまり子どもが亡くなってしまうような病気や不幸は来ないで。」という野口さんの願いが込められているのですね。

赤いハートマークや青いハートマーク、野口さんの願いがよく分かるように歌おうとすると、おのずと歌声や歌い方が変わってきますね。このように、「歌の心」を大切にすばらしい音楽をつくっていってください。楽しみにしています。

子どもが手に持つのは、河内先生が作ったシャボン玉の模型

（平成25年10月、岡山市立宇野小学校テレビ朝会でのミニ音楽授業より）

vol.4 World Report［ワールドレポート］

音を奏でる喜びを

カンボジアの子どもたちとともに

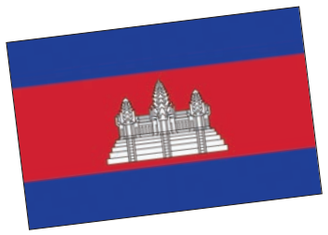
古川はるなさん

フルート奏者として国内外で活躍されている古川はるなさんは、とある言葉をきっかけに、カンボジアの子どもたちに音楽を届ける活動を始めました。現地で出会ったのは、過酷な境遇で心に傷を負った少女たち。音楽を通して彼女たちに安心感を抱いてもらうにはどうしたらよいだろうか。自分自身で音を奏でる喜びを味わってほしい。そう考えた古川さんは、子どもたちにリコーダーの手ほどきをします。このレポートでは、2度のカンボジア訪問で出会った子どもたちの様子や、現地での活動について、音楽に対する強い信念をもった演奏家ならではの視点でお伝えします。

フルート奏者。東京藝術大学より博士号（音楽）授与。篠笛も演奏する。音楽が人間精神にどのように寄与するかということをライフワークとし、演奏・教育を通して追究している。常葉大学教育学部、短期大学部音楽科非常勤講師。

カンボジアについて

アンコール遺跡群などの世界有数の歴史的建造物を有する美しい国。近年は高い経済成長を続けているが、1970年代のポル・ポト政権時代に推定100万人以上が犠牲になったという悲しい歴史が、今もなお影を落としており、貧富の差や教育環境の改善が課題となっている。



Basic Data
人口：約1,610万人
面積：18.1万平方キロメートル（日本の約２分の１弱）
首都：プノンペン
言語：カンボジア語

（外務省ホームページより）

カンボジアとの出会い

「ここにいる少女たちは、モノクロの絵しか描けない。なぜなら、彼女たちに見えている世界には色がないから」――長らくアジアの子どもたちのためにボランティア活動をなさっている日本人女性、河村（かわむら）恵子（けいこ）さんが、カンボジアの国境近くの街、バッタンバンの施設にいる少女たちについて語った言葉です。現地で少女たちとパステルアートをしたところ、モノクロの絵ばかりで驚いたとのこと。

少女たちがいるのは寄宿舎を備えた職業支援学校で、カンボジア国内の孤児や貧困に苦しむ子、過酷な環境で育ちトラウマを抱えた子などを保護し、近くの学校に通わせたり、縫製の職業訓練を授けて自立の支援をしたりする、シェルターとしての役割も担っている施設です。

彼女たちの中には家庭内暴力などの被害者も多く、売春組織に売られそうになったり、奴隷として裕福な家に買われていったりと、その境遇は聞くほどに想像を絶するものでした。私は、アジアの発展の陰で取り残され犠牲になっている、このモノクロの世界にいる少女たちのために、金銭的支援だけでなく音楽を届けたいと思い、現地へ行くことを決めました。

初めてのカンボジア訪問

初回の訪問は2016年。河村さんに同行してカンボジアとミャンマー各地の教育機関・職業訓練施設を訪問し、行く先々でフルートの演奏をしてきました。生演奏を初めて聴く子どもたちがほとんどで、目を輝かせ身を乗り出して聴いてくれました。

少女たちの前でフルートを演奏

話に聞いた少女たちのいるバッタンバンは、首都プノンペンから車で７時間ほど。この街では住民のほとんどが農業に従事し、タイへ出稼ぎに行く人も多いそうです。また国境の街ならではの闇ビジネスも横行し、多くの少女たちが犠牲になっています。訪問したのはローマに本部を置くサレジアン修道会が運営するトレーニングセンターでした。

ここでは、心にトラウマを抱えた少女たちのために、演奏を聴いてもらうだけではなく、私自身がフルートを吹くことで経験し、得てきたことを、彼女たちと分かち合いたいと考えました。それは例えば、心の中に広がる内的世界の存在と、その奥深さや尊さを感じること。また、内なる世界と外の世界がつながる感覚をもつことで得られる安心感や、この世界に存在していいのだという自己肯定感。息は魂に最も近いとも言われますが、フルートは吹いた息が直接音になるエア・リードの楽器で、魂の発露として音を奏でるという意識がそのような感覚を育ててくれたのだろうと思います。

笛の仲間であるリコーダーも、学習用のものはプラスティック製とはいえ、息で音をつくる作音楽器という点では同じです。自分の息で自分だけの音を奏でることにより、同じような感覚を味わってもらい、彼女たちの世界が少しでも温かく美しいものになればと、要らなくなったリコーダーの寄付を募って持って行きました。

初めて耳にするリコーダーの音色に興味津々

リコーダーを手に歓喜の声

互いに教え合いながら練習する

実際に少女たちに会ってみると、カンボジアの国民性ゆえか、安全な環境に保護されている安心感からか、想像よりもずっと明るくて屈託のない子が多い印象でしたが、中には心を閉ざす子や情緒が安定しない子も見られ、傷の深さが感じられました。それでもここの少女たちは互いの痛みを分かち合うように助け合いながら生活しており、リコーダーを吹くときも自然と教え合っていました。楽譜を読むこともできず、見たこともない楽器を最初はおそるおそる触っていましたが、しだいに音を出すことに喜びを感じ、いい音が出たときや１フレーズ吹けるようになったときには、ほんとうにうれしそうな表情を見せてくれました。最後に、「そのリコーダーはプレゼントだよ」と言ったときの歓喜の声は今も忘れられません。驚くほどの意欲と集中力でリコーダーを吹くその姿から、音を奏でること、内なる息吹を音に換えていくことが、彼女たちにとって代えがたい瞬間であることを感じました。

体を使って音高感を身に付ける

なお、カンボジアの公立学校では音楽の授業は行われていませんでしたが、一部の私立の小学校では音楽の授業を行っていると聞き、その学校でリコーダーを教え、音楽の先生への指導も行ってきました。ふだんはどの学年にも同じ歌を教えているのが現状と聞き、「６年間を通したカリキュラム作成と教師の研修が急務」との意見交換をし、継続的な教育支援の必要性を確認しました。

２度目のカンボジア訪問と音楽教育の実践

プノンペンにある「ドン・ボスコ・スクール」の校舎

そして再び、2018年にプノンペンにある私立校「ドン・ボスコ・スクール」を訪問し、授業を行ってきました。現地ではまず、６年間の成長に合わせた授業内容を考えるために、子どもたちの状況やカンボジア特有の事情、学校の教育理念などを教えてもらいました。カンボジアでは、バッタンバンで聞いたような少女たちへの身体的・精神的虐待に加え、家庭でも学校でも体罰が横行していること、学校や街中で人身売買用に子どもが誘拐され続けていること、孤児や難民も多いこと、栄養が足りていないため心身の発達が遅いこと、街のいたるところで大音量の音楽が流れている環境で育っていること、音楽を通して内面の静けさと豊かさを育てたいこと、等々。教育の質・内容ともに、今もなお、ポル・ポト政権時代に多くの文化遺産の継承が途絶えてしまった影響が残っているようです。

学校を運営するスタッフからは、日本ではどのようなカリキュラムが制定されているのか、教員養成のためにどのような研修があるのか、幼稚園や高校では音楽の時間があるのか、楽譜を読めるようになるにはどうすればいいのか、楽器のメンテナンスはどうしているのか、などの質問が挙がりました。また、日本の教科書を見せると、「とてもシステマティックにできている」と食い入るように見ていました。

１週間の滞在の中で、１年生から５年生までの全クラスの授業、朝と放課後には寄宿生と教職生にリコーダーと読譜のレッスン、音楽の先生には個別指導、そして皆の前でフルート演奏を行いました。子どもたちは学べるうれしさと意欲に満ち溢れているものの、特に精神の発達や成熟度に関しては課題が多くあります。子どもたちの身体の中にある抑圧されたエネルギーを解放させたり、精神を穏やかに整えたりするために、音楽が働きかけることができるような、教科としての学び以上に音楽療法的内容をもたせたカリキュラム作成の必要性を強く感じました。また、歌を歌う以外に、例えば低学年はリズム活動で全身のエネルギーを使い、中学年は音探しで外の世界に耳を開き、高学年はリコーダーで内観力を高める、というような授業提案も行いました。

低学年のリズム活動の様子

クリスマスには子どもたちが空港や病院で
チャリティーコンサートを行った

カンボジアの未来を見つめて

ポル・ポト政権後のカンボジアが海外の援助によって再建されてきたように、他国の確立された教育システムを取り入れることはカンボジアの教育発展に大きく貢献することと思います。一方でカンボジアには独自の文化があり、音楽も同様、クメール舞踊とともに歌われるようなとても美しい音楽が数多く存在します。バッタンバンの教会でもヨナ抜き音階のカンボジアの音楽が演奏されていましたが、それらの音楽は、現在は社会科の教科書に歌詞のみが掲載されています。国内各地に残る美しい五音音階の音楽は、子どもたちの教材としてもふさわしいですし、何よりカンボジアの文化や世界観を次世代に伝えるものとして、どうか失わないように受け継いでいってほしいと思います。

ボランティア活動というのは、自己満足で終わったり、結果的に押しつけや強制になってしまったり、対象者の自発性や生来の特性を奪ってしまうこともあります。関わる程度と深度を模索する中で、こうした子どもたちの姿や、たくましく生きようとする生命力、屈託のない素直な心に教わることも多く、与えるという一方向ではない関係性を実感しました。

リコーダーを手にポーズ

私は演奏家としての経験からも、受け取った富を限られた場所や人のみで共有するのではなく、広く循環させていくことが文化の発展の鍵になると実感していますが、２度のカンボジア訪問で現地の人々と触れ合い、あらためてその思いは間違っていないと確信しました。この活動は始まったばかりで未熟ゆえの迷いも多いですが、途絶えてしまった文化や教育の継承を再開すること、そして人類の遺産である音楽という大いなる富を、世の中に、また次の世代へと循環させていくことを、カンボジアの人々とともに一歩ずつ目指していけたらと考えています。

（文・写真：古川はるな）文中の地名等は筆者の表記にそろえています。

番外編

［ワールドレポート］
World Report

“図書館で会いましょう”プロジェクト
ミュージックビデオ公開中！

World Report［ワールドレポート］のvol.1でご紹介した、
作曲家の弓削田健介（ゆげたけんすけ）さんによる“図書館で会いましょう”プロジェクト。
テーマ曲「図書館で会いましょう」は、
図書館関係者が集まる全国図書館大会をはじめ、
読書活動に力を入れている学校などでも歌われるようになりました。
このたび、この曲の英語版である“World of Fairy Tales（ワールド オブ フェアリー テイルズ）”の
ミュージックビデオが完成し、YouTubeで一般公開されています。

弓削田健介作品集『図書館で会いましょう』

“図書館で会いましょう”プロジェクトとは……
図書館や本をテーマにした楽しい歌をまとめた作品集『図書館で会いましょう』を制作し、その収益の一部をチャリティーとしてNPO法人SAPESI-Japan［南アフリカ初等教育支援の会］に寄付。日本で使われなくなった移動図書館車を譲り受け、南アフリカへ届ける活動に役立てられている。

撮影は東京都にある北区立中央図書館で行われました。赤レンガの趣ある建物を舞台に、同作品集CDでも歌っているヴォーカルのteaさんと、いろいろな国のバックグラウンドをもった子どもたちが出演しています。

ミュージックビデオはこちらでご覧いただけます。
https://youtu.be/7-x2XEqglQA（エル）

“World of Fairy Tales”のシングルカット（カラオケ付き）はiTunesやAmazonでご購入いただけます。
iTunesから入手　Amazon

Oh My ゴッイ先生

最終回

作：魚師（さかなし）（ぶりちゃん）

タイトルロゴ：石野春加（DAI-ART PLANNING）